

秋田市
大森山動物園情報誌

コミュニケーション

No. 90

2015.10月号



Contents

P2・3 こんにちは!あかちゃん
移動動物の紹介/訃報
飼育動物数

P4~7 [特集]
**アフリカゾウ
来園25周年**

P8・9 飼育レポート/動物病院から
P10 高木美保名誉園長の活動紹介
P10・11 イベントレポート
今後のイベント
P12 飼育日誌/お客様の声
かたばた通信

写真:今年来園25周年を迎えたアフリカゾウ

ヨロシクね!

仲間入りした
動物たち



コモンマーモセット

1月5日に双子、6月14日には当園で初めて三つ子が生まれました。残念ながら三つ子のうち1頭は死亡しましたが、残る2頭は順調に成長しています。



ワオキツネザル

3月9日と5月1日に生まれた2頭は、すっかり大きくなり、お母さんから離れて自分で餌を食べたりしています。



シロフクロウ

大森山動物園で初めてシロフクロウが繁殖しました。展示場とバックヤードのペアがそれぞれ産卵し、合わせて11羽が孵化しました。このうち1羽はお客様により近くで見ていただくために、人の手で育てています。人工育雛の様子については、この後の飼育日誌をご覧ください。



ニホンイヌワシ

3月18日に待ちに待ったヒナが誕生しました。全国の飼育下のイヌワシは信濃とたつこの家系が多く、周り中親戚だらけといった感じでしたが、このペアに2004年旧西目町で保護された野生由来のイヌワシが産んだ卵を抱かせ、ヒナを育ててもらいました。新たな血が加わることになり、今後のイヌワシの繁殖計画に希望が見えそうです。

このほか、フンボルトペンギン、ニホンザル、アカカンガルー、シバヤギに赤ちゃんが生まれています。

こんにちは! あかちゃん

大森山動物園で1月以降に生まれた赤ちゃんを紹介します。



ボリビアリスザル

7月11日にボリビアリスザルに赤ちゃんが生まれました。4年ぶりです。ゲンとすずの間に生まれました。まだ、お母さんの背中にいるときもありますが、一頭で活発に動き回るようになりました。



レッサーパンダ

3月18日に長野市茶臼山動物園からオスのケンシンがやってきました。ケンシンは、一昨年当園で生まれたゆりのお婿さんとして鯖江市から借り受けました。来園してしばらくは餌を食べず心配しましたが、今は大森山にすっかり慣れたようです。ゆりとの間に赤ちゃんが早く生まれるといいですね。

このほか今年は、
アムールトラのヒロシにロシアからお嫁さんを
また、**カリфорニアアシカ**のマヤにもお嫁さんを
迎え入れる予定です。お楽しみに!!

コブハクチョウ

5月22日にJRA京都競馬場からコブハクチョウのペアが来ました。当園のコクチョウとの交換です。卵3つも一緒に来ましたが、こちらは残念ながら孵化しませんでした。鳥っこの水辺が少し賑やかになりました。



ベニコシゴウインコ



7月15日に千葉市動物公園から繁殖を目的に借り受けました。雌のランが羽翼のところに、お婿さんとしてやってきました。担当が九太郎と名付け、ランとのお見合いを経て同居しました。末永く仲良くなれますように。

げんまでね!

大森山を後にした動物たち



ゴマファザラシ

3月25日、昨年末3園館連携の一環として、鶴岡市加茂水族館からお借りしていたゴマファザラシのあらしが単身赴任を終えて帰りました。初めはなかなかペンギンたちと打ち解けられませんでしたが、最後の方では一緒にプールで泳ぐ姿が見られました。



フンボルトペンギン

7月18日、当園で生まれ育ったフンボルトペンギン3ペアの6羽が、弘前市弥生いこいの広場へ旅立ちました。新天地で3ペアの生活が始まります。

飼育動物数		
類	種数	点数
哺乳類	51種	330点
鳥類	39種	203点
は虫類	11種	29点
両生類	2種	3点
魚類	3種	31点
無脊椎動物	1種	16点
計	107種	612点



計報 忘れないよ…



マントヒヒ

チャウス／オス 26歳

サル舎でひとりわ目立つマントヒヒでした。立派なマントと歌舞伎の見栄を思われるような表情。26歳という高齢で衰弱のため入院しました。最後まで食欲はありませんでしたが、3月4日に死亡しました。



アムールトラ アシリ／メス 16歳

ベルリンの動物園で生まれ、2007年に多摩動物公園から来園し、2008年にはウイッキーとの間にアルルとミルルを産み、育てました。とてもきれいで美人のトラでした。16歳という年齢を感じさせないような動きを見せてくれましたが、4月の下旬から食欲低下等が見られ、5月27日に息を引き取りました。天国でウイッキーと仲良くね。

このほかにも右記の動物が亡くなりました。

ダイアナモンキー、コモンマーモセット、ボリビアリスザル、ブレーリードッグ、インドガン、インドホシガメ



アフリカゾウ 来園25周年

今年は、アフリカゾウが秋田市大森山動物園に来て25年目という区切りの年です。

ゾウはご存知のとおり人気の動物です。当園で開催しているサマースクールに参加した小学生に、25年以上前にアンケートを実施したところ、「今後見たい動物」の上位に必ず上げられていたのがゾウでした。

その後、秋田市制100周年事業の一環としてゾウとキリンの導入が決定し、1989年に大型動物舎の建設が始まりました。1990年秋、当園にゾウがやって来て25年。この間に起きたさまざまな出来事を、一番間近で見てきた担当者たちが振り返りながら、将来についても目を向けています。

来園

1990年9月30日、南アフリカ共和国のクルーガー国立公園より待望のアフリカゾウが来園しました。野生由来のオス1頭メス1頭で、どちらも当時体高約1.2m、体重約400kg、推定1歳でした。来園が予定よりも半年ほど早まったため、ゾウ舎がまだ完成しておらず、現在のラクダ舎を一部改造して仮住まいしました。最初は環境が変わったため飼育担当者を



警戒している様子でしたが、時間の経過とともに慣れ始め、飼育担当者にミルクや餌をねだり体を触らせるようになっていきました。1991年3月11日には新築し

たゾウ舎へ引っ越しました。4月1日の春開園日から一般公開し、5月5日には公募により愛称が、オスは「だいすけ」、メスは「花子」に決定しました。



子ゾウから大人のゾウへ

「だいすけ」の右牙が歯のヒビから入ったばい菌が原因で化膿し、何度も治療したこともありましたが、2頭はおおむね順調に成長しました。人間同様に、動物の健康管理のため体重管理は重要です。そこで、1991年の小さい頃から体重測定を行っていました。ゾウは生まれた時すでに約100kgほどあり、一年で約300kgほど増えるといわれていますので、人間用のヘルスマーターではとても測れません。そこで1000kgまで測れる牛馬用台はかりを2台使用しました。「花子」の体重は1993年6月には1086kg、

1995年6月には1627kgでした。1997年1月には2000kg以上と予想し、トラック用の重量計測器で測ったところ、1850kgでした。予想よりは少なかったものの、順調な体重増加が見られました。

「だいすけ」は残念ながら何度練習しても体重計に乗ってくれず計測できませんでしたが、「花子」以上に大きくなっています。



特集

トレーニング・直接飼育から準間接飼育へ

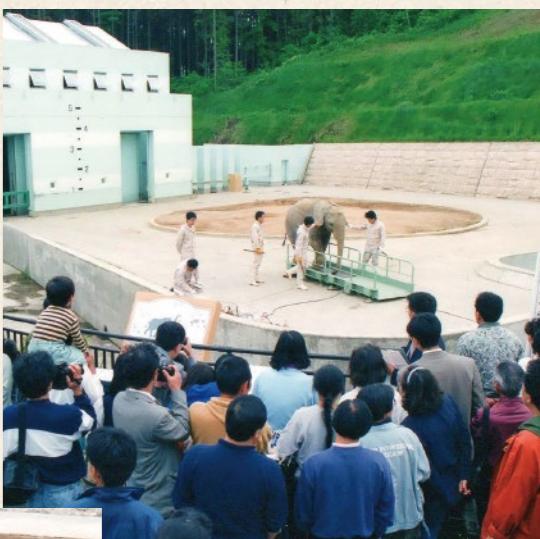


ゾウを飼育するには、健康管理のためのトレーニングが大変重要で、ゾウが当園に来てから始めました。

ゾウは、足の蹄が伸びすぎたり足の裏の皮膚が厚くなりすぎたりするとヒビ割れてしまい、その部分から感染症を起こして歩けなくなったりするため、足のケアなどをしています。

また、健康状態のチェックや妊娠判定のため、採血して血液検査もしています。それらを行う場合、ゾウは体が大きく力の強い動物ですので、小さな動物のように網で捕まえ人の力で押さえたりすることはできません。そこで、人の合図に従い体の向きを変えたり足を上げたりできるようにトレーニングしています。

このようなトレーニングをゾウと同じ室内(空間)に入れて行うことを直接飼育と



いいます。一方、ゾウとは同じ空間に入らず柵越しに接触して行うことを準間接飼育といいます。大人のオスゾウはマストと呼ばれる繁殖を伴う危険な時期があるため、動物園では、子ゾウのうちは直接飼育で管理しますが、ある程度の年齢になると飼育員の安全を考慮して準間接飼育に移行するのが一般的です。

当園でも、ゾウ来園以来直接飼育で管理してきましたが、成長に伴い、1999年から準間接飼育に移行しました。準間接飼育の場合、直接飼育に比べゾウとの距離が遠くなるため、体のケアはしづらくなります。以前と同様のトレーニングができなくなる不安がありましたが、トレーニング手法を変えたり、部屋の一部を改造することで、現在は以前と同様かそれ以上の足のケアや健康管理ができます。

牧草の共同栽培

当園ではゾウの糞で堆肥を作り、その堆肥を利用してゾウが食べる牧草を栽培しています。1999年からは地元の秋田市立浜田小学校と共同で栽培を始めました。毎年、5月に児童と共に種を播き、7月には大人の背丈ほどに成長した牧草を児童が収穫します。収穫した牧草を運び、児童一人一人の手からゾウに直接与えもらっています。児童が自然の循環について学び、考える良い機会になっています。



みるみる大きくなりました!

ゾウ舎の外壁には高さを示すメートルの表示があります。1991年当時と2011年の写真を比べると大きさの違いが一目瞭然。この20年の間に体重は約10倍ほどになりました。



ゾウといっしょに 飼育担当者も成長しました!

1992年から担当していますが、ゾウは私の先輩になります。来園当時推定1歳だった2頭も今年で推定26歳になりました。これからもゾウの成長を見守りながら精進していきます。

飼育
担当者
から

山上昇 これまで、大小さまざまなケガや病気を乗り越えて今日に至っていますが、これからも大森山動物園で最初に思い浮かぶ動物になってもらえるよう、1日を大切に2頭と共に歩んでいきたいと思います。

西方理 だいすけと花子が病気やケガをせず、長生きし、近い将来二世が誕生するように努力していきたいです。



アフリカゾウ 来園25周年

特集

はなスポット

2013年に無人餌やり施設「ゾウはなスポット」がオープンしました。それ以前にも土日限定でまんまタイムやエサやり体験を実施していましたが、ゾウをより身近に感じてもらい魅力を伝えようと外展示場に新たに設置しました。ゾウの鼻に直接餌を与えることができ、ゾウの実際の大きさをすぐ近くで体感できるため、お客さまから「すごく近くて迫力がある」と大変好評です。



鼻のケガ

2006年10月10日に「花子」が鼻先を10cmほど切断する大けがをしました。夜間のことでの原因がはっきりと分かりませんが、「だいすけ」とのトラブルか係留チェーンに挟まってけがをしたようです。鼻先の指状突起といわれる部分がなくなってしまい、小さい物をつまむような餌の取り方はできなくなってしまうのではないかと心配しましたが、数日で器用に粉状の餌も鼻で巻くように持つて行って食べることができますようになりました。生活にはほとんど支障がなくほっとしています。

現状と未来

1930～1940年代にはアフリカ大陸に500万頭ほどいたアフリカゾウが、象牙目的の密猟などにより現在は50万頭程度まで減少しているといわれています。

日本の動物園でも最盛期には68頭のアフリカゾウが飼育されていましたが、ゾウの繁殖は難しく、また高齢化が進み、2013年には39頭に減少しました。このままの減少が続くと、2030年には日本に7頭しかいなくなるという心配な予測数字も出ています。

「だいすけ」と「花子」は今年推定26歳



になりました。お客様に「赤ちゃんが生まれないの?」と聞かれることがよくあります。2頭の相性は良く、交尾も時折見られますが、未だ二世誕生には至っておりません。小さい頃から2頭だけで兄妹のように育ってしまったことが影響しているの

かもしれません。ゾウの寿命は60年ほどですが、メスの繁殖可能年齢は30代くらいまでといわれています。これから10年が大事な時期です。二世誕生に向か、さまざまな研究機関や動物園同士協力しながら努力していきたいと思います。

國井博 だいすけと花子がこれからも皆から愛されるように頑張っていきたいと思います。

堀籠麻子 だいすけの恐がりっぷりも花子のやんちゃっぷりも見ていて飽きません。この2頭の子ゾウも見たいので、ゾウ夫婦と一緒に努力します。

山本明子 今年度から大森山動物園で働いています。だいすけくんと花子さんにとって、信頼できる担当者になれるように頑張りたいです。



アフリカゾウ
来園25周年
DAISUKE & HANAKO
since 1990

痴痛(せんつう)

「だいすけ」が今年5月2日より原因不明の痴痛(※)症状を起こし、食欲不振と下痢が止まらず、腹痛により座り込むことがありました。給餌量の制限などを行ったところ、数日で回復の兆しを見せましたが、ある程度給餌量を増やすと再び同様の症状を繰り返し、5月下旬までこのような状態が続き大変心配しました。その後、6月に入ると給餌量を増やしても同様の症状を起こすこともなく、現在は順調に推移しています。

※痴痛／お腹が痛くなる消化器官の病気で、草食動物などに時々起きる。

飼育レポート

トナカイの暑さ対策を追求して

飼育展示担当 柴田 典弘



高温時の集中ケア

毎年6月から9月末までの約4ヶ月間、ツンドラ地帯で生息しているトナカイの飼育管理上欠かせないのが「暑さ対策」です。さらに、7月中旬からは宿敵「サシバエ」対策も加わります。いずれの対策も突き詰めると「暑さ対策」にまとめられますが、2年間徹底的に取り組んだ結果、サシバエ対策が暑さ対策とともに重要なことが分かつてきました。

動物の暑さ対策は日陰を作ることから考え始め、次のステップとして散水、さらには氷や冷凍ペットボトルの設置など、より過ごしやすい環境を作り上げることが中心となります。2013年の6月にトナカイの担当となりましたが、その直後から暑さに苦しむトナカイと向き合い続けてきました。スプリンクラーの設置から始め、7月、8月は冷凍ペットボトルを体の周りに密着させるなど、暑さ対策の基本的な手法をかたくなに実践する日々でした。冷凍ペットボトルは3頭に対して最大約100本使用したこともあります。しかし、結果的にこれらの取り組みでトナカイが十分に癒されることはありませんでした。なぜなら、一日中吸血性の「サシバエ」に付きまとわれているため、逃れようと数十分毎に展示場を走り回っていて、そもそもリラックスできる時間も場所もないのです。さらに、原因は不明ですが、トナカイは他の動物よりも明らかにサシバエを多く誘引していることが分かりました。

初年度の反省を踏まえ、2014年のシーズンは、サシバエ対策として虫よけ剤の使用を開始しました。およそ3~4時間に一

回ずつ散布することにより、一気に解決を図ろうとの試みでした。これは想定以上に高い効果があり、虫よけ剤については今年度も継続実施しています。ただ、気温が30℃を超えると、暑さ・サシバエ対策の効果が現れづらくなってしまいます。苦しそうな呼吸のトナカイを見て、「ここで諦めたら、飼育していることを悔やんでしょう」。そう思った私は、さらに一步前に踏み出することを決意しました。それが「トナカイの自発的遊泳」の模索です。そもそも野生のトナカイの1年は泳ぎと共にあり、気温や水温に関わらず泳ぐことで知られています。当然ながら私も知つてはいましたが、既存の展示場に設置されている流水施設(トナカイのせせらぎ)があることで、どこか満足していたように思えます。水深は一番深いところでも約20cmと泳ぐことは到底できないものの、トナカイが脚だけ水に入っている姿が確認されると嬉しく思う程度でした。

2014年8月、ルドルフ(オス 当時1歳)の体重増加を目的として取り組んでいた、採食目的のお散歩放牧中、園内にある塩曳潟の水辺に辿り着いた時「ここで泳がせたい」と感じました。初めて水辺に来たルドルフでしたが、水に対する抵抗感は全く感じられず、今にも泳ぎだしそうに見えました。その後、サクラ(メス 当時9歳)でも同様の反応が見られ、今年に入ってから具体的な実施手法の検討を開始しました。

2015年5月18日の飼育日誌に「10歳のトナカイが初日から泳いだことには驚かされた」と記載しました。7月以降も暑さはもちろんですが、一定数のサシバエが吸着した途端水に入る様子が確認され、その効果の高さが証明されました。暑さ対策を追及し続けた約2年間でしたが、ようやくトナカイ自身が自らの意思で対策を選択できる環境に辿りつくことができました。

現在、不定期ではありますが、園内塩曳潟の一部をケージで囲った「鳥っここの水辺」で、トナカイの水中散歩を実施しています。今後も、この環境をさらに有効的に活用するための手法を模索し続けたいと思います。



スプリンクラーの水にあたるトナカイ

嬉しそうに水に入る様子



泳ぐトナカイ

シロフクロウ

飼育展示担当 川本 朋代



人工育雛1日目の時点で、このヒナは生まれて10日目のまだ手のひらサイズで体重140gでした。しかし、ヒヨコのような愛らしさはまったくありません。なにしろ目は小さくギョロギョロしており、口は顔の1/3を占めるほど大きく、どこかモンスターを思わせました。また、体には所々羽が生えておらず、ピンクの地肌はむき出でみてほららしい姿でした。ひいき目に見てもカワイイとはとても言えず、「本当にこのヒナはあの美しいシロフクロウのヒナなのだろうか」と疑うほどでした。

そんなヒナですが、エサをよく食べ、日に日に大きくなっています。1日見ないだけでも、同じヒナとは思われないほど一回りも二回りも大きくなっているのです。そして、人工育雛を始めて11日過ぎた頃には、体重は約4.5倍の645gにまで増え、体は灰色の羽毛で覆われました。不細工と言われた時とは一変し、顔つきはしっかりし、灰色のふわふわもこもこの塊になりました。この辺りから、カワイイかも……?という声が上がってきました。

「ハク」と名づけられたこのヒナは、今では親と同じぐらいの大きさにまで成長しました。まだ羽は生えそろっていませんが、白い羽は少しずつ生えてきています。

現在腕に乗せる練習をしています。デビューしたら、ぜひ見に来てください。



12日齢
(人工育雛1日目)



21日齢
(人工育雛10日目)



63日齢
(人工育雛52日目)

動物病院から

アムールトラの「アシリ」

獣医師 小川 裕子



今年の5月にアムールトラのアシリ(メス)が亡くなりました。16歳でした。

みんなに愛され、何度も会いに来てくださるファンのかたがたも多くいました。人気イベントの「まんまタイム」では、大きな前脚で肉を押さえるダイナミックな動きで子どもたちを驚かせしていました。

そんな元気いっぱいのアシリですが、5月中旬に食欲が落ちてきました。ふだんは肉を3~4kg位ペロリと完食しますが、少し残すようになり、ついには水しか飲まなくなってしまいました。

そんな中、私たち獣医師も懸命に治療を試みました。注射を打つにも採血するにも、かまれると危険なので直接アシリに触れることはできません。注射は、「吹き矢」を使って行いました。

採血は、血液検査で腎臓や肝臓がどのような状態なのか間接的に評価するために行うのですが、麻酔をかけないと採血できません。そこで、採取できる糞便と尿を主に検査し、指標としてですが、肝臓腎臓等に病気がないかどうか確認しながら治療しました。

また、飼育員もアシリが食べやすいものを、鳥がダメなら豚肉をカットして与えるなど、一生懸命ケアしていました。あるとき、猫用の高栄養処方食の缶詰を食べるか疑問に思いつつも飼育員に渡したところ、「すぐに試してみましょう」と行動してくれ、檻の奥に居るアシリの口元に届くようにと細いはしごを上り、檻の上から缶詰の中身を与えてくれました。「アシリ、おいしそうだよ～。少しでも食べよう!」とアシリにやさしく声をかけている飼育員の姿が忘れられません。

懸命の看護のかいもなく、アシリは5月27日に亡くなりました。検査してみると、全身のガンが原因でした。最後は呼吸も大変でしたが、治療の痛みにも耐えて良く頑張ってくれました。お客様や飼育員に愛され、幸せな一生だったと思います。



高木美保さんが 大森山動物園 名誉園長に就任

秋田市は「命とのふれあい、人と動物との共生」に高い関心を寄せている女優の高木美保さんに、動物園の幅広いPRとアドバイス等をいただくため、「大森山動物園名誉園長」を委嘱しました。

2月19日(木)の委嘱式で穂積市長から委嘱状を手渡された高木名誉園長は、「動物を通して、子どもたちに命の大切さを伝えたい」との抱負を述べました。

3月21日(土)の通常開園初日には、開園セレモニーに出席し、ボニーやトナカイ、オモリンなどと一緒に来園者を出迎えました。また当日、昭和48年9月の開園以来、総入園者数が1000万人に達し、1000万人目のお客さまと一緒に記念のくす玉割りでお祝いし、記念品の授与に参加していただきました。

5月16日(土)、西部市民サービスセンターで名誉園長講演会「動物園で感じた命の絆」を開催し、約450人の市民が参加しました。

講演会では、高木名誉園長がこれまでの体験を通して感じた「命の絆」についてお話したほか、大森山動物園の魅力についても語りました。また、後半はスライド上映により、アムールトラやイヌワシなどの写真を見ながら小松園長、飼育員と楽しく対談しました。

7月25日(土)・26日(日)の両日に開催した「親と子のふれあい写生大会」の表彰式を8月23日(日)に行い、高木名誉園長から入賞者に国民文化祭メモリアル賞が授与されました。また、表彰式終了後の「名誉園長と巡る園内ツアー」では、約100人の来園者と一緒にリスザル、トナカイ、マーコール、シロフクロウの4カ所を回り、小松園長や飼育員と談笑しながら動物たちと触れ合いました。



入園者1000万人達成 記念品授与



名誉園長講演会



名誉園長と巡る
園内ツアー



飼育の日イベント

4月19日(日)～5月6日(水)

(公社)日本動物園水族館協会では、4月19日を「飼育の日」としています。今年は飼育員の一日を丸ごと体験できる「チャレンジ・THE・キーパー」を開催したほか、飼育員の仕事や素顔を紹介した「パネル展」、「ドキュメンタリー動画の放映」、キリンやトナカイの取り組みを紹介するトークイベント、さまざまな鳥類の卵を紹介する「たまコレ(たまごコレクション)」など、盛りだくさんの内容で実施しました。



どうぶつサイエンス

5月24日(日)

動物の不思議について学ぶ自然科学学習館との共同イベント。今回は「あしのひみつをさぐろう」と題し、園内を回りながら、さまざまな動物の「あし」について学びました。26名の参加者は、飼育員の話を聞いたり、動物たちのあしを実際に観察しながら、形やその仕組みについて学び、鳥だけでもいろいろなあしの指の形と数の違いがあることを学びました。



春の動物ふれあい フェスティバル

6月7日(日)

動物園の人気イベント、春の動物ふれあいフェスティバルを開催しました。当日は天候に恵まれ、たくさんのかたが訪れました。どうぶつパレードでは、ラマを先頭にホンドフクロウ、アカコンゴウインコ、ヘビ、ペンギンなど8種類の動物が行進しました。パレードにはイメージキャラクター「オモリン」の舟も登場。「どうぶつパレード」の一文字が名前に入っている8人の子どもたちが舟を引っ張り、パレードを盛り上げてくれました。このほか、無料エサやり体験や動物との記念撮影、猛獣舎を見学する裏側探検、ウォーククイズなど、この日限りの特別イベントを行いました。



イベント レポート

Event
Report

移動動物園 in 新屋鹿嶋祭

6月14日(日)

大森山動物園が位置する秋田市西部地域(新屋地区)の子どもたちが主役の伝統行事「新屋鹿嶋祭」で移動動物園を開催し、地域のかたがたなど713人が来場しました。会場となった新政酒造跡地では、昨年から、まちづくりの推進として、地域住民や学校などが主体のイベントが数多く開催されています。従来、イベント主催者からの依頼を元に実施している移動動物園ですが、日頃から動物園の行事等に協力いただいている地元への感謝と、さらなる連携強化のために、今回は特別に“自主参加”となりました。通常の飼育作業が忙しい午前中でしたが、ボランティアガイドさんや各職員の協力もあり、イベントは無事に終了。暑い中、お祭りに参加し、疲れた表情の子どもたちも、動物やオモリンと触れ合い、笑顔になった様子を見て、お世話になっている地元の新屋に、ほんの少し「恩返し」できただと実感した1時間でした。



ゾウさんペーパー作り体験

6月21日(日)

アフリカゾウの来園25周年を記念したイベント「ゾウさんペーパー作り」を開催し、10組24名が参加しました。参加者は、ゾウの粪から纖維を取り出した紙の材料を木枠の網で水につけて形を整え、アイロンや電子レンジを使って乾燥させると、お気に入りのゾウのスタンプを押して、自分だけのオリジナルゾウさんペーパーを作りました。最初は恐る恐る紙をすいていましたが、回を重ねることにどんどん上手になり、子どもも大人も夢中で作っていました。



与次郎駅伝

7月19日(日)

秋田市中心市街地で毎年実施されている「第4回与次郎駅伝」に4名の職員が「チームオモリン」として出場しました。イメージキャラクターの「オモリン」が応援する中、動物園をPRしながら市街地を走り抜け、無事完走しました。



さよなら感謝祭

11月29日(日)

通常開園最後の日曜日の11月29日に、動物の慰靈とお客様への感謝の気持ちを込めて、「さよなら感謝祭」を開催します。当日は、通常入園料大人720円のところ520円で入園できます。(他の割引との併用はできません。)



国文祭メモリアルフェスティバル in AKITA 秋田市大森山動物園 第38回親と子のふれあい写生大会

7月25日(土)・26日(日)

今年で38回目となる写生大会を開催しました。初日は、豪雨に見舞われ、翌日は一転した暑さの中、参加した親子は一生懸命に作品を仕上げていました。提出された作品392点の中から、秋田市造形教育研究会による審査で合計107点の作品が入賞しました。

8月23日(日)に行われた表彰式では、入賞者に市長賞や市議会議長賞、市教育長賞などの賞状と副賞が贈呈されました。受賞された皆さん、おめでとうございました。



[秋田市長賞]
外旭川小学校3年
黒崎真歩さん



[秋田市議会議長賞]
御所野小学校1年
畠山陽依さん



[秋田市教育長賞]
手形山幼稚園
渡部颯太さん

サマースクール

7月30日(木)・31日(金)

第41回サマースクールを実施し、2日間で60名が書いた中、飼育作業に汗を流しました。

初日の午後からは、夜の動物園で飾られた「絵灯ろう」作りを行いました。翌日は、「ゾウさんペーパー作りを行い、普段と違う動物園を体験していただきました。



夜の動物園

8月14日(金)～18日(火)

大森山動物園の夏の恒例イベント「夜の動物園」を開催しました。人気の動物の食事風景が見られる「夜のまんまタイム」や「工芸やり体験」に加えて、ゾウ来園25周年記念「今夜限りの寝室見学」や大森山動物園のヒーロー「ミルヴェンジャー」ショーなど、日替わりで特別イベントを毎日実施しました。また、期間中はサマースクール参加者と秋田公立美術大学の学生が描いた絵灯ろうやペットボトルのランタンがほのかな灯りで園内を照らし、夜の動物園を幻想的に彩りました。今年は、例年より1日長い5日間の開催で、約1万人のお客さまにお越しいただきました。



雪の動物園

2016年1月9日(土)～2月28日(日)

毎年好評の「雪の動物園」は今シーズンも開催。一面銀世界の動物園と、その中で過ごす動物たちの表情をご覧ください。



飼育日誌



1/5	レッサーパンダ	ゆり♀ 除雪の音をかなり怖がっている。
1/6	ツキノワグマ	稔♂ 冬ごもり中。室内で物音に反応し頭を上げてあくびをしていた。
1/7	ニホンイヌワシ	風斗♂ × 西目♀ 交尾行動確認。
1/9	タンチョウ	14繁殖個体を親と離す。♂10.0kg ♀9.7kg。
1/10	ビーバー	「春の七草パック」を来園者の前で解説付き給餌。
1/12	チンパンジー	のり子♀ 甘酒の缶を見たからか素直に動く。
1/15	キリン	カンタ♂ 比較的強めの追尾行動確認。
1/21	シンリンオオカミ	フレーメンも見られたがペニスの露出なし。
1/21	チンパンジー	交尾行動あり。
1/24	フタコブラクダ	全頭にカリん酒とおにぎりを給餌。
2/2	ホンドリス	♀ 2ヶ月ぶりに園内散歩。
2/7	ツキノワグマ	♂ 習丸が大きく垂れ下がってきている。
2/9	タンチョウ	♀群 給餌開始。
2/19	タンチョウ	ペア 求愛ダンスのようなものを確認。
2/21	ツキノワグマ	シゲタ♂ 元気はあるが食欲廃絶。
2/21	ラクダ	稔♂ 屋外展示開始。
2/24	ノドジロオマキザル	♀ 散歩中、ボニーと遭遇し足取り重くなる。
2/28	チンパンジー	ナナエ♀ 捕獲して尾の褥瘡を治療。
3/1	ツキノワグマ	のり子♀ ガラス越しに男性客に近づくが、
3/1	タンチョウ	タイプではないのか、すぐに立ち去る。
3/3	アフリカゾウ	母娘を外へ出す。
3/6	タンチョウ	シゲタ♂ 生き餌(フナ・ドジョウなど)で採食確認。
3/9	ケヅメリクガメ	だいすけ♂ 工事期間中足のケアができず、
3/14	ニホンコウノトリ	足の裏のひび割れがひどくなっている。
3/17	ワオキツネザル	お市♀ 孵化303日。頭部が赤くなってきた。
3/19	マーコール	黄5 陰茎脱および尿結石の治療。
3/20	ミニブタ	コウノトリ舍冬囲い撤去に伴い、ヒデタダと
3/20	レッサーパンダ	タンチョウペアの体重測定。
3/20	タンチョウ	仔2頭のうち1頭が展示場で死んでいた。
3/21	ワピチ	首の後側に咬まれた傷を認める。
3/24	アカコンゴウインコ	成♂弟 麻醉下で削蹄。
4/2	モモイロペリカン等	とん平♂ てんかん発作あり。
4/2	トナカイ	ケンシン♂ 検疫終了し展示場へ移動。
4/2	タンチョウ	ペア 交尾確認。
4/6	ニホンイヌワシ	♂ 両方の角が落ちる。
4/11	エリマキキツネザル	メレブ♀ 上嘴の先端5mm程折れる。
		BW測定および放鳥。
		サクラ♀ 右落角。
		産卵。
		第1ペア卵(2個)を八木山動物園へ搬出。
		巣箱にワラを入れる。

4/13	ピューマ	ピュー子♀ 出産に備え、非展示。
4/17	インコ舍	オオバタン・キバタン同居。
4/23	アミメキリン	♂ 体温測定。
4/25	チンパンジー	コタロウ♂ 体調不良のため麻酔下で診療。
4/27	インドガン	右足脱臼のため入院。
5/3	アムールトラ	ヒロシ♂ 室内に血尿。
5/4	ボリビアリスザル	すず♀ 腹部に膨らみ。
5/8	レッサーパンダ	全頭にタケノコ給餌。
5/10	エリマキキツネザル	子どもの声が聞こえる。
5/11	アフリカゾウ	交尾、挿入2回、射精1回確認。♂13時頃、四肢が震え、倒れそうな状態あり。
5/13	チンパンジー	ココ♀ 朝の地震で少し不安な顔をしていた。
5/15	ライオン	ラガー♂ 麻酔下で爪切り。ワクチン接種。
5/18	ヨーロッパフランゴ	ペア2組の交尾確認。
5/19	シロフクロウ	(展示場)1卵目有精卵と判明。3卵目を確認。
5/20	フンボルトペンギン	ヒナ41日齢 顔周り、翼の先端換羽始まる。
5/22	アムールトラ	アシリ♀ 発情継続。前日給餌分そのまま残る。
5/26	ノドジロオマキザル	夕方の収容時間がかかる。部屋の奥で横になる。
5/28	ミーアキャット	陽太♂ 左下腹部が横に突出。経過観察。
5/28	チリーフラミング	(ウエルカム)妊娠個体が出産した様子だが、子どもの確認できず。
5/29	ヨーロッパフランゴ	Bペア(♂紺×♀青)、午後交尾確認。
5/30	カナダヤマアラシ	ペア 産卵(今季初・昨年より3日早い)
5/31	ニホンイヌワシ	暑さでバテる。ミストで復活。
6/2	アカコンゴウインコ	(展示場)ヒナ巣立ち、74日齢。
6/2	アミメキリン	メレブ♀ 午前中「んだ」を良く喋っていた。
6/2	レッサーパンダ	2頭削蹄。
6/5	ラマ	ナナ♀ 初めての採血練習。ユウタ♂、ゆり♀も実施。
6/7	ボアコンストリクター	アンズ♀ パレード練習参加。
6/8	カリフォルニアアシカ	脱皮完了。
6/16	ツキノワグマ	採血成功。
6/17	ワオキツネザル	ルビー ルイに対して威嚇行為あり、ルイに
6/22	アフリカゾウ	収容に時間がかかる。
6/25	アミメキリン	仔ケガのため治療後、親のもとに返す。親に
7/2	アフリカゾウ	しっかりとしがみついていた。
7/9	コモンマーモセット	有料餌やり体験「はなスポット」再開。
7/10	ラマ	2頭の血圧測定実施(初)。
7/13	チンパンジー	♀採血。血検の結果、白血球数が通常の
7/20	アフリカゾウ	倍になっていた。要観察。
7/20	レッサーパンダ	ススキ♂・つかさ♂とタマリン レオ♂午後のみ同居。トラブルなし。

お客様の声

1/31 移動動物園のお客さま。「フクロウを初めて見ました!なかなか動物園に行けないので、こんな間近で見られてうれしい。」

3/29 ひょうたん橋のゼニタナゴ水槽を見つけて、「きれい」といって水槽に駆け寄ってくるお客様がいました。

4/23 オーストラリア在住のペルー出身だという老夫婦が来ており、ラマ・アルパカについて与えている餌や家畜としての利用方法について教えていただきました。ほぼお互いにボディーランゲージで、英会話能力の必要性を感じました。大森山動物園は2回目とのことで、大変に気に入っていただけたようでした。海外のかたでもさらに楽しんでいただけるよう、園内の看板にもっと英語表記が必要と感じました。

5/6 イベントで、整理券配布場所と実施場所が異なるため分かりづらいとのご意見がありました。

7/12 先日アシカのトレーニングを夕方見たお客様が数日後に来園し、今朝のトレーニング時に「また、来ちゃった」とお孫さんと一緒にトレーニングを見て行ってくれました。

かたばた通信

本コミュニケーション誌は1990年の創刊から25年が経過、今号で90号の歴史を重ねてきました。そこには多くの思いが詰まっています。

また、今春3月21日には1973年の開園以来入園者数が1000万人を超えた。人口減少が続いている地方、秋田にあって小さな数字とは思いません。秋田市約30万人の市民が一人30回程度、秋田県約100万人の県民が一人10回程度来園していることになります。どちらの方はさまざまですが、秋田の大森山動物園は多くの市民が自分の庭のように親しみを感じ、また、多くの応援や地元企業様の支援を受けながら存在してきた市民動物園であることを、改めて実感させられる数字とも言えます。歴史を重ねてきた意味がそこにあるように思います。(園長 小松守)